



# オーストラリアの多文化主義から学ぶ

(財)自治体国際化協会支援協力部多文化共生課

## はじめに

オーストラリアが七〇年代に「白豪主義」を廃止し、「多文化主義」を国是としてから三〇年余りが経ちました。現在のオーストラリアは世界の各地域から移民を受け入れ、多彩で調和の取れた多文化共生社会を築き上げることができました。この画期的な変革は、まさに日本の明治維新にも相当する大改革であったと言えるでしょう。

日本が今後多文化共生社会を実現していくにあたり、この三〇年にオーストラリアが経験した変化は、多文化共生社会の青写真を描く上でよき手本となると思われます。

そこで、二〇〇九年九月に(財)自治体国際化協会(以下…クレア)では市民国際プラザにおける多文化共生特別企画展にあわせて、「多文化主義の国オーストラリア」と題し、慶応義塾大学の関根政美先生による講義及びクレア多文化共生課のマット・ダグラス(プログラム・コーディネーター)による座談会を開催しました。

なお、企画展についての詳細な説明については、本誌五〇項「国際協力情報ファイル」をご覧ください。

## 講演会

### 「なぜ今、多文化共生か？」

### 多文化共生の先進国

### オーストラリアから学ぶ

九月一四日には、関根政美氏(慶応義塾大学教授兼オーストラリア学会理事)より「なぜ今、多文化共生か?——多文化共生の先進国オーストラリアから学ぶ」と題して、多文化共生社会を構築するまでのオーストラリアの歴史を踏まえたご講演をいただきました。当日は仕事帰りの会社員、大学生、地方公務員等、計一九名の方にご参加いただきました。

関根氏によると、日本における「多文化共生」は、異文化集団への支援、社会的弱者の包摂を意味する傾向が強く、関根氏はこの考え方を「福祉主義的多文化主義」と

呼びます。日本の政策が弱者を守ることを重視するのに対して、オーストラリアの場合にはこれに加えて「経済主義的多文化主義」という特徴があります。経済主義的多文化主義が移民に対して支援を提供する目的は、移民の自立を促し一国民として社会に参画させるためです。言い換えれば、社会的弱者と思われる人が平等に社会に参画し、最終的に一般国民に匹敵するような能力を身につけるまで支援を続けることです。こういう風に、オーストラリアの多文化共生には「共生」と「競生」というふたつの目的があると関根氏はいいます。多文化が共存するという意味の「共生」だけではなく、人種・民族・エスニシティの違いを超えた競争を求め、よりよい人材を獲得し、経済的効率を上げるという意味での「競生」がオーストラリア社会の活力を生んでいるとの指摘に多くの参加者が共感を覚えたようです。

オーストラリアの多文化主義社会において、様々な文化が共存できるのは基本的なルールがあるからと関根氏は説明しました。



↑関根政美氏による講義

「多文化主義  
といつても何  
でもかんでも  
認めようとい  
うわけではな  
い」と説明し、  
慎重に定義さ  
れている枠の  
中にオースト  
ラリア国民が

行動すべき基本理念が二つ存在します。一つ目は「国益優先」といい、祖国よりもオーストラリアとその未来と利益を優先させることが期待されています。二つ目は、オーストラリアの基本的構造である民主主義、言論と宗教の自由、男女平等等の「リベラルな価値と制度」を受け入れることです。最後に、「権利と責任」が提唱され、自分自身の文化や信条を表明する権利があると同様、他の人々もその見解と価値を表明する権利があるということを意味します。このような国に定められている大きな行動規範があるからこそ、オーストラリア国民は移民制度と多文化主義社会を長年支持してきたと思われまます。

また、連邦政府は、移民を「将来の国民」として捉え、積極的かつ包括的に支援事業を提供しています。エスニック・メディア（英語以外の言語による新聞やラジオなど）を助成すると同時に、全国民を対象とした多文化放送（SBS放送局等）も実施して

います。このように、連邦政府は移民を支援するだけではなく、全国民に対して多文化主義への啓発にも取り組んでいます。

また、連邦政府が制定した移民に対する基本方針をもとに、州政府・地方自治体・企業・NPOが多文化主義事業に取り組み等、オーストラリアでは、連邦政府の先導により関係機関の連携が図られています。

「日本においても同様の政府主導のリーダーシップが必要だ」という関根氏のコメントが印象的でした。

## 座談会

### 「オーストラリア生まれの マットさんに聞こう！」

#### —多文化共生ってどんな社会?—

九月二五日に、オーストラリアの多文化主義を話し合う場として、座談会を開催しました。マット・ダグラス氏による「多文化社会ってどんな社会—オーストラリアから学ぶ」と題したプレゼンテーションで、座談会は始まり



↑オーストラリアの多文化主義を説明する  
マット・ダグラス氏

多文化主義が制定されて一〇年後に生まれたダグラス氏にとって

は、様々な人種のルーツを持つ人と一緒に生活することは当然のことで、小さい頃からあまり深く考えなかったといいます。外国から来た同級生や知り合いを「外国人」として意識せず、社会の構成員として自然に捉えてきました。ダグラス氏自身も家族の中に、レバノン系の人、中国系の人、スコットランド系の人がいるので、移民は大変身近な存在です。

プレゼンテーション後、参加者は自由に見交換し、日本がオーストラリアの多文化主義から何が学べるのかについて話し合いました。政府、地方自治体、一般市民、在住外国人、皆が自主的に多文化共生社会を築き上げようという意思を持つのが大事であり、実現にはまだ時間がかかるのではないかとこの意見でほぼ一致しました。

## 終わりに

オーストラリアは多文化共生社会の手本だと言えるでしょう。現在、各地域で在住外国人が急増している日本は、オーストラリアの経験から様々なことを学ぶことができます。政府のリーダーシップ、戦略的な移民受入制度、充実した移民支援・教育制度がオーストラリアの多文化主義社会の特徴だと言えます。来年二月にも多文化共生をテーマにした特別企画展を開催する予定ですので、多くの方のご参加をお待ちしております。